

## アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 7回目

### 空想と反逆とエディプスコンプレックス

今回のテーマ

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く←この途中までやってきた

III. 警察官とエディプスコンプレックス

前回までのまとめ

帆高の物語の出発点

『天気の子』の主人公森島帆高の行動は、『ライ麦畑でつかまえて』のホールデン・コ

ールフィールドと類似している。今までの生活に欺瞞を感じ、そこから抜け出して大都会に理想を求めるといふ物語の始まりは、エディプス・コンプレックスからの逃避であり、儚くも脆く崩れやすいものである。理想としていた都会での一人暮らしは叶わず、帆高は仕方なく須賀への助けを求めることになる。

そこで出会った須賀、夏美との交流をへて、帆高は自分自身を見出していくようになる。

### 帆高とエディプス葛藤

須賀、夏美との共同生活は帆高にとって人間らしい生き方を取り戻し、大人への成長を遂げていく。これはエディプス葛藤に向き合う重要な準備段階となる。

そこで困窮時に出会った陽菜と再会した帆高は、路地裏のホテルにチンピラによって連れ込まれそうになった彼女を助けようとする。

どうにか彼女を助け出し、命からがら二人は廃ビルへ逃げ込むが、そこで陽菜は自分が「晴れ女」であるという秘密を明かす。それは二人は互いにとって希望の光（「ハレ」）の存在となり、晴れビジネスを展開していくことになる。

そこで二人は深い情緒的交流をし、現実を向き合ったのではなく、この人といれば、物事はうまくいくというような躁的防衛の結託を二人はしたのではないかと感じられる。

### 陽菜の巫女的存在と対幻想

帆高と陽菜が知り合った後、二人は晴れビジネスを展開する。このビジネスは表面的には問題解決への取り組みに見えるが、実際には陽菜が母の喪失という根本的な痛みと向き合うことを避け、周囲の期待に応えることで自分の存在価値を確認しようとする病的な適応だったとも言える。

天気の巫女は「人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間」である。晴れ女である陽菜は、まさにこの巫女的存在であった。『君の名は。』の三葉と同様に、巫女は神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担う。

陽菜が晴れ女であり続けることは、巫女としての生き方を選択し、超自然的能力によって東京の天候という共同幻想的要請に応え、最終的には「犠牲」として消失する運命を背負うことを意味する。

### 陽菜が晴れ女になった経緯（いきさつ）

陽菜の弟の凪のアドバイス従い、帆高は陽菜への18歳の誕生日プレゼントに「指輪」を渡そうとする。

「指輪」は一般的に永遠の絆、約束の象徴であり、帆高と陽菜が今後深くつながっていくことを暗示させる。そして帆高が陽菜にプレゼントをあげようとしたときに陽菜の秘密が語られる。

帆高：陽菜さん

陽菜：帆高（タイミングがぶつかる）

帆高：あ！ごめん

陽菜：あ、ううん なに、帆高？

帆高：いや……別に陽菜さんこそ、なに？

陽菜：あ、うん——

陽菜：——帆高、あのね

陽菜：私——

陽菜の周りに水が舞っている。次の瞬間に突風が吹き、陽菜の傘と上着が飛ばされてしまう

帆高：あっ！

帆高：陽菜さん！！

帆高の目の前には誰もいない。遠方から陽菜の声が聞こえる

陽菜：——帆高っ！！

陽菜は街灯より高い場所に浮いていた。その後しばらくして陽菜の爪先がアスファルトに着くと、そのまま彼女は膝から崩れ落ちてしまう。

陽菜：私が晴れ女になったのはね—— 1年前の、あの日

陽菜：去年、お母さんが亡くなるちょっと前にね—— 私、一人であのビルの屋上に登ったことがあるの そこはまるで、光の水溜りみたいだった。雲間から一筋だけ陽が差していて、その屋上を照らしてたの。あの廃ビルおん屋上には一面に草花が咲いていて、小鳥がさえずっていて、朱い（あかい）鳥居が陽射しに光っていて

（回想シーン）陽菜が手を合わせながら鳥居をくぐる。彼女が強く祈る中で雨の音が突然消え、彼女が目を開くと彼女は青空の真ん中にいた。そこで陽菜は雲の上の草原、そしてキラキラと煌めきながら泳ぐ空の魚達を見る。

陽菜：気づいたら私は鳥居の下に倒れてて、空は晴れてた。久しぶりの青空だったの。あの時から私はね、空と、繋がっちゃったんだと思う。

#### 【考察】

前回扱ったシーンで、以下の言葉を中心に考察していきたい。

「あの時から、私は空と繋がっちゃったんだと思う」

この陽菜の発言は深い心理的意味を含んでいると考えられる。

ウィニコットは躁的防衛の特徴の一つとして、「内なる現実の人々を"生きたまま仮死状態"にしておくこと」を挙げている。陽菜の発言はまさにこの状態を象徴しており、ここでは母という陽菜にとって大切に重要な人物の死への否認である。

陽菜は、母を失うかもしれないという耐え難い現実と直面した時、鳥居（境界）を越えて「死の世界」に片足を踏み入れることで、生者として感じるべき痛みから逃れ、「感情的な死」を選んだとも言える。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、天気を支配することで、**外界の全能的コントロール**を試みている。これは躁的防衛の典型的な特徴で、内的な痛みや混乱に対処するために、外界を思い通りに操ろうとする試みである。陽菜の場合、家族を失った喪失感や生活の困難といった耐え難い現実に対して、天気という自然現象すら支配できるという万能感で対抗しようとしているとも解釈できる。

陽菜は自分の内的な苦痛や不安と真に向き合うことを避け、代わりに「晴れビジネス」をすることで、外界への働きかけに没頭する。これが「内なる現実の人々を生きたまま仮死状態にしておく」ことに通じている。そして晴れ女としての力を得ることで、一時的には全能感を味わえますが、それは同時に生の世界から少しずつ離れていくプロセスでもあり、最終的に彼女が「消える」危険性へと発展していく。それは「君の名は。」で三葉が糸守町の消滅とともに亡くなったこととリンクする。そして両者に共通するのは自身の自我の喪失である。（シンエヴァ Q を時間があれば示す。）

破のラストでシンジが見せた行動は、まさに躁的防衛の特徴を体現している

- ・ 綾波を救うという**全能的な支配**への欲求
- ・ 現実の複雑さや他者の意志を無視した**一方的な行動**
- ・ 喪失の痛みに向き合うことを避けた**衝動的な解決策**

そして Q の世界は、その躁的防衛が現実と激突した結果の「代償」として現れている。ウィニコットの言う躁的防衛の破綻は、しばしば深刻な抑うつ状態や現実との乖離をもたら

すが、まさにそれが：

- 荒廃した世界として**外在化**
- 仲間たちからの孤立として**対人関係の破綻**
- シンジ自身の無気力状態として**内的な空虚感**

という形で描かれているように見える。

陽菜を助け出すには、前述の「君の名は。」で瀧が深く三葉の内面に入り込む中で三葉を救い出したように、帆高が陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出すことができる。そのように帆高との深い交流を通じて陽菜自身が等身大の自分と向き合い、彼女の自我が形成されていくと考えられる。

そしてこの「晴れ女」の秘密を陽菜が帆高に語ったということは、陽菜自身が「消える」危険性がある今の生き方をどうにかしたいと打ち明けているように感じられる。

## 6) 刑事たちの追求と「ケ」

その後、陽菜の家に刑事と女性警官が訪れ、帆高がいなくて事情聴取される。そしてここに保護者がおらず、子ども達だけで生活しているのは問題だと指摘され、後日児童相談所の介入が入ることとなり、これまでの生活が大人達によって壊されることになってしまう。警官は父の象徴であり、超自我対象である。ある意味、彼らは帆高達にこれまでの夢の出来事から別れを告げ、現実と向き合えと言っているように感じられる。

しかし帆高達3人は逃避行をすることにする。それはまさにキャッチャー・イン・ザ・ライの主人公ホールデン・コールフィールドの逃避行のようである。途中、警察に補導されかけるも命からがら逃げ出し、どうにか場末のラブホテルに泊まることになった。そこで3人はカラオケに興じたり、枕投げをしたりと束の間の楽しい時間を過ごす。

そのなかで帆高は思う。

——もしも神さまがいるならば、

お願いします。もう十分です。もう大丈夫です。僕たちは、なんとかやっていけます。

だから、これ以上僕たちになにも足さず、僕たちからなにも引かないでください。

神様、どうか、どうか。僕たちを、もうすこしだけこのままでいさせてください。

そのように帆高が祈るということは、このひときは長くは続かないということに気がついているのだろう。

その後、0時を過ぎて、陽菜の誕生日になった時に陽菜と帆高で取り交わされた会話を  
取り上げる。

帆高：陽菜さん、十八歳のお誕生日、おめでとう。安物だけど、陽菜さんに似合いそうな  
のを探したんだ

陽菜：ありがとう……！　ねえ、帆高はさ、この雨が止んでほしいって思う？

帆高：え？　——うん

陽菜：人柱なんだって、私

帆高：……え？

陽菜：夏美さんが教えてくれたの。晴れ女の運命。晴れ女が犠牲になってこの世から消え  
ることで、狂った天気は元に戻るんだって

帆高：え……まさか……いや、あの人たちの話っていつもすげえ適当だし……まさかそん  
な……消える？　そんなわけ——

陽菜がバスローブを抜いていくと彼女は半身は透明になっていた。

陽菜：……帆高。どこ見てんのよ？

帆高：どこも見て——！——陽菜さんを見てる……

帆高は泣きそうになりながら言う。

陽菜：……どうして君が泣くかな……。最初はなんともなかったの。でもある時気づいた  
の。晴れを願うほどね、体が透明になってくの。…このまま私が死んじゃったらさ……  
きっと、いつもの夏が戻ってくるよ。風をよろしくね。

帆高：イヤだ！！だめだよ、陽菜さんはいなくならない！　僕たちは三人で暮らすん  
だ！

陽菜：帆高……。

帆高：陽菜さん、約束しようよ。俺が働くから！　ちゃんと生活できるくらい、しっかり  
稼ぐから！　もう晴れ女をやめたんだから、体だってすぐに元に戻るよ！

泣き出す帆高を陽菜は抱きしめ、お互い強く抱きしめ合う。

## 【考察】

このやりとりから陽菜は、晴れを願うほど体が透明になっていく異変に気がつき、天気

の巫女は人柱になるという言い伝えを受け入れ、覚悟し、人々の願い（巫女が生贄となり晴れるという共同幻想）に融合する形で、自分自身が消失していく（いわば自我の消失）ことを受け入れようとしているように感じられる。一方で帆高はそのことを自分のことのように嘆き悲しみ、なんとかこの状況を避けようと必死にもがいている。その二人の様子が対照的である。陽菜は何か悟っているかのようであるが、帆高は嘆き悲しみ、必死にどうにかしようともがいている。しかしこの帆高の思いも陽菜も思いであり、帆高の思いは陽菜自身の受け入れられない（彼女の悟りの裏側にある悲しみ）感情の投影のように感じられる。

それだからなのかもしれないが、帆高自身の心の成長が感じられる。この会話の中で帆高は陽菜という存在が自分にとってかけがえのない存在であり、一緒に生活を築き上げていこうという強い主体性を感じる。

そしてその後、帆高と陽菜が見た夢が非常に意義深い。帆高は夢の中で「この場所から出たくて、あの光に入りたくて」と言っていたように、帆高は、エディプス葛藤に押しつぶされ、今ある状況から逃げ出し、大人のように自立した生活を望むが、孤独や不安を抱え、主体的になれないでいた。そこで陽菜に出会い、愛すべき対象を見出し始めたが、夢が途中で終わってしまったということは、それはまだ道半ばということを意味しているのだろう。

陽菜は帆高に出会った頃からのことを回想した夢を見たが、風俗バイトに手を染めようとしたときに、小説版では「君に会えて、本当に幸せだった。もし君に会えていなかったとしたら、私は今ほど、私自身も世界も愛せていなかった。」というように、陽菜にとって、帆高は生きる希望であり、心の支えだった。しかし陽菜は消えて、空の上に行ってしまう。そして空の上の世界に行った陽菜は帆高にもう会えなくなるかもしれないと考え、嘆き悲しんでしまう。

ここから帆高が陽菜を助け出す話へと展開していくが、ここが『君の名は。』で三葉の住む糸守町が隕石の落下で消滅し、そのことを知った瀧が、三葉を救い出すために宮水神社の御神体へと一人で向かう展開と似ているものを感じる。

その後、刑事がそのホテルに乗り込み風は児童相談所に帆高は警察署に送られることになる。しかし帆高は警察署から逃げ出し、逃走劇を繰り広げていく。

### Ⅲ. 警察官とエディプスコンプレックス

## 1) 警察の保護 そして 逃走の意味

警察は父親の象徴の側面があり、超自我を表しているように見える。そして『天気の子』における警察の保護は、帆高自身がまだ大人になりきれておらず、未熟な存在であり、無力感を象徴しており、現実から目を背け必死に逃げようとする帆高に対して、警官たちは目覚めて向き合えと言っているようにも感じられる。それと警察の保護は同時に思春期におけるさまざまな喪失への無理解への怒りを象徴しているように感じられる。

帆高にとって陽菜がいなくなるということは希望の光が失われたことを意味する。そしてそれはある意味、現実に向かうための移行対象を失ってしまったことでもある。大人たちは、その喪失を全く理解できていない。それはライナスにとって唯一無二の大事な毛布が、ボロボロの汚らしい毛布としか思えないのと同じである。

だから必死に陽菜の姿を追い求める理由のわからない警察達は、自分達のルールをことごとく壊し、逃げていく帆高にただ怒りを感じ、彼らは自分の職務をすることに命をかけ、帆高を必死に捕まえようとする。そこに帆高と大人達、言うなれば子供と大人の心の断絶が生じているのである。

帆高が警官との逃走劇を繰り返し広げている時に夏美に遭遇するが、夏美は帆高の思いに共感し、帆高の逃走劇の助太刀をする。それは彼女がまだ、大人になりきれておらず、子供の心を持ち続けているからであろう。そうして帆高は警察の追手から逃れて陽菜が晴れ女になったという代々木の廃ビルへと向かっていく。そしてそこに辿り着いたときに待っていたのが須賀圭介である。

## 2) 須賀圭介と対峙すること

ようやく辿り着いた帆高だが、そこに待ち構えていたのは、これまで東京での生活を援助してくれた須賀圭介であった。しかし須賀は帆高の思いを理解する子供側の立場ではなく、警察と同様に大人の立場で帆高に接していた。そこで帆高は須賀と対峙することになる。それは、これまで父親をはじめ、様々な大人達に抱いていた彼のエディプス葛藤の再演である。

須賀：帆高！

帆高：須賀さん？

須賀：探したぜ、帆高

帆高：え…どうして…。

須賀：お前、自分がなにやってるか分かってんのか？

怒った口調で言う須賀。帆高は怒鳴り返して言う

帆高：陽菜さんが消えたんです！

須賀：———！

帆高：俺のせいなんです、俺が晴れ女なんてやらせたから

須賀：帆高、お前——。

帆高：今度は俺が助けないと……！

パトカーのサイレンが会話に割り込む。

帆高：行かなきゃ！

須賀：おい待てよ！（須賀が帆高の腕を握む。）お前どこに!?

帆高：あそこから彼岸（ひがん）に行ける！

帆高は部屋の天井を指す。崩れてぽっかりと抜けた天井越しに、朱い鳥居が見えている。

須賀：お前、なに言って…

帆高：空にいるはずなんです！非常階段を伝ってあそこまで行けば！

帆高は前に出ようとするが、強く腕を引かれる。

須賀：帆高！

帆高：助けなきゃ！

須賀：待てよ、空になんていうわけねえだろ？

僕の腕を掴んだ須賀さんの力が強くなる。

帆高：離せ！

須賀：しっかりしろ!!!

帆高は須賀にビンタされる

須賀：とにかく落ち着けよ、帆高。今すぐ警察に戻った方がいい。話せば分かってもらえるさ、お前は別に悪くねえんだから

腕を掴み、懇願するような口調で言う。

須賀：このまま逃げ続けたら、もう取り返しがつかなくなる?そのくらい分かるだろう？

（帆高の思い）この人がなにを言っているのか、僕には本気で分からなくなる。逃げる？  
逃げているのはどっちだ?見ないふりをしているのは誰だ？

須賀：（優しい口調で）心配すんなよ。俺も一緒に行ってやるからさ。二人で事情を話そうぜ、な？

そう言いながら、強引に帆高を出口に引っばっていく。

帆高：離して！ 離してください！

須賀：落ちつけて言ってんだろ！

帆高：離せよっ！

帆高は思いきり、須賀の腕に噛みつく。

須賀：痛ーッ！ てめえ！

帆高は腹を蹴られる。背中から壁にぶつかり、床に倒れ込む。

帆高：うぐ…！

目を開いたその場所に、拳銃があった。

以前、帆高が捨てた銃だ。彼はとっさにそれを掴み、銃口を須賀に向ける。

帆高：邪魔するなっ！

須賀は目を見開く。

須賀：帆高…？ お前、そんなもん持って——。

帆高：陽菜さんのところに（帆高は目をつむる。）行かせてくれよ！！

ドンー！

重い発砲音が廃ビルに木霊する。天井にむけて帆高は銃の引き金を引いていた——。

### 【考察】

先ほども示したように須賀は今までのような帆高の立場を理解する存在ではなく、大人の立場の視点で帆高に接している。しかし帆高の考えを子供っぽい幻想と切り捨て、現実を見据えるようと論ず言葉は、まるで須賀自身に言い聞かせているようにも聞こえる。須賀にとっての現実とは、妻の死という喪失が受け入れられず、娘にも会えない、いわば前に進めない諦めの生活である。一方で、須賀と帆高の共同生活で育まれた絆があるからこそ、帆高の強い意志に心揺さぶられる部分もある。しかし、その思いを必死に打ち消し、警察に自首させようとする。それは、帆高の無謀な行動を止めるためであり、同時に、自分自身の未熟さを克服できなかったという悔恨の表れとも考えられる。しかし帆高はそれに決して屈せず、殴られても怯まず、銃の引き金を引いてまで自分の意志を突き通そうとする。

それは以前のチンピラのような金髪の男性に陽菜がホテルに連れ込まれそうになったシーンで、彼が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまうが、陽菜を助けようと拳銃を発砲する出来事と反復する。

帆高はこれまで、エディプス葛藤に囚われ、逃げるように生きてきたと考えられる。しかし今、帆高は、本気で人を愛し、愛する人を守り、生きていこうとする青年へと成長したように感じられる。

帆高の強い意志は、最終的に須賀をも突き動かしたと考えられる。リーゼントの刑事に帆高が連行されそうになったとき、須賀は怒りを露わにし、刑事を突き飛ばし、帆高が陽菜を助け出そうとすることに手助けする。これは、帆高の決意に須賀が心を打たれたが故に無意識のうちに手を貸したのではないだろうか。